

第2回薬剤師需給の 将来動向に関する検討会	資料 1
平成19年6月29日	

薬剤師需給に関する主な意見（案）

1. 薬剤師の供給について

- 今後の供給については、大学数及び定員数の推移をみるかぎり、減少する傾向にはない。
- 一方で、現在の入試状況などを考えると、薬剤師の質を維持することが困難な状況にある。
- 入学者の質の低下を憂いでおり、入学時点の薬学生の質を6年間で高めるためには、実務実習前に薬学共用試験をきちんと行い、また、薬学教育の第三者評価も行っていく必要がある。
- 薬学共用試験OSCEは、現在の定員数では多すぎて、成り立たないという意見もある。
- 薬剤師の質の低下を招かないよう、供給側である大学側における真剣な協議が必要になる。
- 大学入試が選抜の意味を成さなくなってしまうのであれば、質の低下は防ぎきれない。
- どうすれば志願者が増えるのか、全体の数が多すぎるのか、何らかの形で対応をとらなければいけない。
- 薬科大学・薬学部に対して、高校生が魅力ある学部として感じていない。薬剤師という職業の魅力が失われているのだとすれば、それは問題。

2. 薬剤師の需要について

- 今後の需要については、これまで従事している業務種の動向のほか、6年制課程を修了した薬剤師を中心として、在宅医療への参画、受診勧奨、健康づくり（保健指導）などにおいて、社会的ニーズの高まりや薬剤師自らが活躍の場を拡大することなどを通じて、増加する可能性もある。

○ 薬局に従事する薬剤師数については、継続的に増加傾向にあるが、需要予測にあたっては、今後、処方せん枚数の伸びが鈍化していくことに配慮すべきである。

○ 病院・診療所に従事する薬剤師数については、病院の統廃合などにより、減少する可能性があることを懸念されるが、リスクマネジメントの観点から、医療安全や各種専門領域において、臨床に強い薬剤師のニーズはある。

また、地方では人材の確保が困難であり、雇用したくともできない事情があり、結果として、都市部に比べて給与が高い傾向にあるなど、雇用はより難しい局面になっている。

○ 製薬企業に従事する薬剤師数については、適材適所で配置されており、比較的規模の大きな製造販売業では、増加あるいは一定の雇用数を保っている。

医薬情報担当者（MR）に占める薬剤師数は減少傾向にあるが、その背景にはMR職を希望（選択）する薬剤師が少ないためと思われ、また、研究職についても、企業合併などにより、新卒者の採用を控える傾向にあることの影響がある。

○ 医薬品一般販売業に従事する薬剤師数については、一般用医薬品の販売制度の改正に基づく登録販売者制度の動向も考慮する必要がある。

○ 医薬品卸売販売業に従事する薬剤師数については、各企業の統合により、各支店数が減少していることに伴い、必要とする管理薬剤師数も減少しているため、減少傾向にあり、今後も同様の傾向が続くと予想される。

○ 行政に従事する薬剤師数については、人数としてはあまり変化がないと思われるが、衛生行政の中で食品や環境など、活躍する領域はでてくる。